



米山が通っていた映雪舎で使われていた論語と算盤



論語と算盤の絵  
 洋画家・小山正太郎作  
 (渋沢史料館所蔵)

## 米山梅吉の論語と算盤

「近世我邦實業界の泰斗と謂はれる澁澤子爵は、農家に生れ士分となつて徳川氏に重用され、更に明治政府に及んで其の要職に就いた。(中略) 子爵は常に『論語』を愛讀するといふので有名であつたが、嘗て畫家に『語論』と算盤を描かした一幅を床の間に掛けてゐたと云ふことである。富を作り之を使用すべきを説くと共に、仁義道德の重んずべきを唱へ、諸種の集會に於ける演説等にも、毎に『論語』も章句を引かれたことであつた。(「澁澤榮一子爵と論語」米山梅吉著『常識関門』所載)

米山より28歳年上の澁沢榮一は、銀行設立や会社立ち上げなど多くの事業を手掛けた。同時に福祉や教育へも関心をよせ、養育院や大学開設にも力を注いだ。澁沢が掲げた理想の経済システムは「合本主義」と呼ばれ、カネ、モノ、ヒトを集めて事業を行い、その成果を分かち合つてみんなが豊かになる、というものであった。澁沢と米山。両者ともに公益性の追求を理念に、企業経営に邁進した。

澁沢の父は、幼いころから榮一に対して論語を例に出して注意や示唆を与えた。澁沢は、外国へ出向き、商業や女子教育など新しいものを取り入れるの必要性を感じながらも、教育における漢学の重要性を実感していた。米山は二人の息子に先立たれる、という個人的な経験から、幼稚園・小学校設立に尽力した。教育に関しては、両者それぞれの思いから始めた事業ではあったが、学びの基本を大切にするという点では、相通じるものがあった。

「論語は眞に人間實生活の指針をなしたもので、之を常識的學問と稱することが出来るのであらう」(同)  
 論語=教育、算盤=経済活動。常識的見識を重んずる人々たちによって、日本の近代化は進められた。

# 東京ロータリークラブ創立100周年史 『奉仕の道 100年』

東京RC百周年担当理事  
吉澤 審一  
東京RC百年史編纂委員長  
黒田 康裕



百周年史のタイトル『奉仕の道100年』は、東京RC第83代会長植田新太郎さんが創立90周年を迎えるにあたり、2010年10月15日の日本経済新聞の「文化」欄の取材に応じて掲載された記事より引用さ

せて頂きました。植田元会長が付けられた記事のタイトルは「振り返れば奉仕の道」でありました。

記事の主旨は、若い頃から奉仕活動に参加され、遂には東京RCに参加し今に至った。その時々において「奉仕活動」に努めてきたが、73歳となったこの時、自分の来た道を振り返れば正に「奉仕の道」がそこにあったと書かれています。

この記事を読み起こし、東京RCの奉仕活動100年を振り返れば、正に年史のタイトルに相応しいではないかと、引用させて頂きました。ロータリー活動とは如何にと問われた時の模範解答がここにありました。

植田新太郎さんは東京RCの100周年を楽しみに、我々役員や運営メンバーを指導して下さいました。しかし2018年1月突然の病で不帰の人となられました事は残念でなりません。この100年史は故植田新太郎さんにも捧げたいと思います。

「原点に立つと未来が見えるPARTICIPATE!!」記念すべき創立100年を迎えるにあたり、東京ロータリークラブはこのスローガンを掲げました。原点とは、米山梅吉翁が強く共感し日本にもロータリークラブを作るその原動力となったロータリー普遍の原理である



2010年10月15日  
日本経済新聞

濱口道雄会長より積理事長へ  
記念事業目録贈呈



「利己のない奉仕の精神と行動」のことで。

我がクラブは次なる100年もこのロータリー普遍の原理である「利己のない奉仕の精神と行動」を堅持することを誓う、この想いがスローガンに込められています。100周年史『奉仕の道 100年』はこのスローガンをコンセプトに編纂を進めてまいりました。

まず100周年史のタイトル『奉仕の道100年』については、冒頭にご説明させていただきました通りです。

題字は会員の平井正修さん（臨済宗普門山 全生庵住職）をお願いをさせていただき、快くお引き受けいただきました。そして表紙の色は東京ロータリークラブのバナーにも使われております「江戸紫」とさせていただきます。

100周年史は2020年10月21日に開催されました「創立100周年記念例会兼祝賀会」の様子に始まり、第1章は「奉仕の道100年」と題し東京ロータリークラブの100年の歩みを纏めさせていただきました。

第2章は「ロータリーとは」としてロータリークラブ誕生とその成長を振り返るとともに、我がクラブが100年の歴史と伝統を継承するためにどのような工夫をしているのかをご紹介します。

第3章では「百周年記念行事」について、そして第4章では我がクラブの最初の長期プロジェクトである「カンボジア地雷除去プロジェクト」、続く第5章では「東北すくすくプロジェクト」を紹介させていただきました。

また100周年史には初めての試みとして、東京ロータリークラブ創立時からの全ての会員の入会年度、お名前、ご所属そしてお役職が記載されました会員名簿『奉仕の道 共に歩んだ仲間』

間』を別冊にて作成致しました。1920年の創立会員28名、1949年戦後の混乱期から再び東京ロータリークラブを再興した157名を名簿の冒頭に紹介させていただいており、1920年から2020年12月までにご入会された総勢2,064名の会員を掲載しております。

年史・会員名簿のご紹介は以上でございますが、編纂作業を終えてその過程を振り返りますと「もっとこうした方が良かったのでは」など反省することばかりでございます。会員の皆様やご覧になった方からおそらく沢山のご叱責を頂戴することもあるかと思いますが、創立100周年のご慶事に免じご寛容賜りますようお願い申し上げます。

最後に、コロナ禍の最中この『奉仕の道 100年』そして『奉仕の道 共に歩んだ仲間』の編纂にご協力いただきました凸版印刷様、東京RC事務局の皆様、年史の題字を快くお引受けいただきました平井正修会員、年史原稿の執筆をお引受けいただきました会員の皆様、皆様のご助力に心から感謝申し上げます。有難うございました。

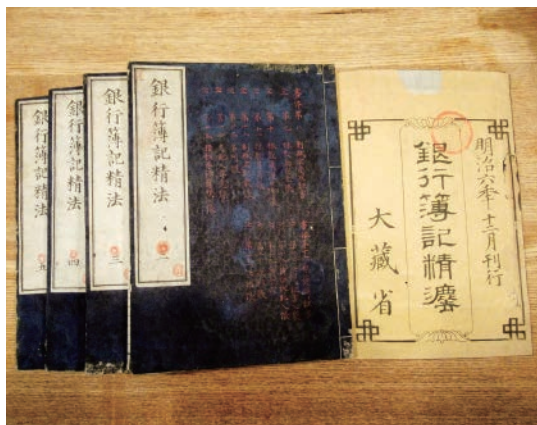


# 米山梅吉翁との二度目の出会い



江頭 彰  
(久留米RC)

私の米山梅吉翁（以下、翁とする）との出会いは著書等においてです。私は福岡県の南部にある久留米市立商業高等学校の教員として商業教育に携わってきました。この商業教育の分野には簿記があります。この「簿記」は明治時代わが国に西洋式のものを導入されました。銀行簿記の導入方法は「お雇い外国人」による直接指導によるものでした。この「お雇い外国人」はのちに翁と親交を深めたA.A.シャンドさんです。25年程前シャンドさんの調査をしていくなかで大阪の古書店から購入した翁の著作『銀行行餘録』に出会ったのが一度目です。



二度目の出会いは昨年（2023年）の10月です。私は昨年3月に教員を定年退職して隠居生活を楽しむ予定でしたが猖獗の日々のため書庫等の断捨離とゴルフに時間を費やしていました。ホームコースの9月に開催される開場記念杯に参加したところ以前勤務した高校の同窓会会長からロータリークラブへのお誘いがあり入会させていただきました。

新参者としてロータリアンとしての心得を学んだり、例

会に出席しますと翁の名前を何回も目にするなかで書庫に眠っていた『銀行行餘録』のことを思い出しました。偶然にも『銀行行餘録』は書庫の中央に開架していました。早速、手にして目次を見ましたら「新隠居論」（再録）が目にとまり、翁が『銀行行餘録』に「この書を世の若き人にさぐ」と記された真意が伝わってきました。この二度目の出会いは偶然とはいえ幸福感で満杯です。

ロータリアンになり翁を顕彰する記念館の存在を知りました。記念館には翁に関する著作等が収蔵されています。今回、未収蔵の著書『立志奮闘：財界巨頭傳』と『帝國實業読本』の2冊の寄贈許可を頂きこの稿を認めさせていただくことになりました。前者はロータリアンになり古書店から購入していたものです。後者は実業学校用の国語の教科書です。

私は、商業教育について前述した簿記に加えて商業道徳に関心があり、その関係する教科書を蒐集しておりました。後者はそのひとつです。これらの著書は国立国会図書館にてデジタル化されておりご自宅のパソコン等から閲覧および複写ができます。僭越ながら2冊について概要を説明させていただきます。

實業之日本社編『立志奮闘：財界巨頭傳』は、昭和5年に実業之日本社から出版され、「貧しき學僕から信託王となった 米山梅吉氏奮闘傳」というタイトルで掲載されています。

「氏は高潔なる人格者として、唯に現代實業青年の敬仰すべき活る典型であるのみならず、其の貧しき學僕より身を起し、苦學力行、千艱萬難を突破して、遂に今日の赫々たる榮譽の地位に迄昇進出世した、セルフ・メイド・マンとしての輝ける奮闘経歴は、空しく



志を抱いて不遇を嘆ずる實業青年をして、感奮興起せざんば已まぬであろう。」と翁を高潔なる人格者の典型と紹介されています。三井の新事業である信託事業に翁が抜擢されたことは、翁の高潔なる人格と信託業によせる翁の強い思いに起因しているといわれています。

また、「高潔なる氏は、實業界には稀に覲る、方正なる品行の持主である。酒を飲まず、明窓浄机を好んで内外の新刊書を繙讀するのが、唯一の娛樂なりと云ふに至ては、高風清節欣仰すべきではないか。」と結ばれています。日本銀行券の肖像に値することではないでしょうか。

2冊目は芳賀矢一編『帝國實業讀本 改制新版 卷四』です。この教科書は、昭和13年に富山府から出版されたものです（奥付きは昭和12年です）。構成は、巻一から巻十まで10冊で編集されています。当時の実業学校は5年制でしたから1年間に2巻を国語の教科書用に充てられています（一部を充てた学校もあります）。

『同書』は巻四ですから2年生の後期に使われて



います。現在の中学2年生に該当でしょうか。『同書』には澁澤榮一さんの「實業と武士道」も掲載されており、この内容を学習した上での自修文として翁の「釣銭」（再掲）が掲載されています。この「釣銭」は、昭和2年に出版された日本朝日新聞社経済部編『経済随想』（日本評論社）に掲載されたものを実業学校用国語科の教科書に再掲されたものです。

翁の執筆の狙いは、日本人の通弊である金銭を卑しむという風潮から起因する「釣銭」（小銭）に対する疎漏な考えに対して反省を求めるものでありました。

そして、この「釣銭」を教科書に再録した理由について、教師用の指導書に以下のように記されています。「大なる経済的成功を獲得せんとするには、まづ小さき経済行為に對して、忠實几帳面でなければならぬことを教へたものである。尤も、「大事は小事から」という心掛は、ひとり経済問題に於てばかりでなく、學術の研究にも、技藝の修養にも等しく大切なことであるが、金銭の場合には、その本来の性質上、利益に於ても損失に於ても、その影響するところは甚だ直接的である。筆者（注…翁のこと）はここに、「小さな経済行為」の一例として、釣銭といふ問題をとら上げた。そして、とかく粗略に取扱はれ易い少額の釣銭と雖も、さういふ小事を粗略にして顧ないという不心得が、やがていかに大きい不経済を招致するか、またいかに眞正なる經濟觀念を傷つけるかといふことを警告してゐるのである。實業を志す生徒にとっては、特に重大なる教訓を含む文として、再録したのである。」

いわゆる、商人に求める「儉約」のことであります。澁澤は利益追求こそ商人の本文であるが、その利益の求めた方に問題があるといっています。つまり、詐欺行為など「してはならないことは、してはいけない」消極的道德に反して利益追求はしてはいけないといっています。さらに、「なすべきことをせよ」積極的道德を唱えています。愚考するに、儉約を通して蓄積した内部留保はほどほどにして、公益（社会）に役に立てなさいといっています。この精神を具現化したのが翁ではないでしょうか。

私にとって、翁との二度目の出会いは最高の出会いとなっています。

よく考へてみると、我々日本人の經濟思想の缺陷は、日常生活の上にも遺憾なく表れてゐる。我々は日常生活に於て浪費を省き、實用を重んずる事に心掛けなければならないのは勿論であるが、先づ以て各人が小拂いなどに際して釣銭を確實に受取る事などから出發せねばならぬ。士は錢を愛せずといふやうな考は、今日では最早時代錯誤で、釣銭の日常極めて疎漏に取扱はれてゐるのは、我々日本人の注意すべき一大缺點であると思ふ。

會て某停車場の賣店の前を過ぎて、偶、一人の客が夕刊新聞一枚を需めて、二銭の銅貨を投げ、店員の「お釣を。」と言ふにも拘らず、「いらぬ。」と答へて去るのを見受けた事があつた。このやうな場面は随所に見られる事であらう。一銭の代價に對して二銭を支拂ふのは、一圓に對して二圓、十圓に二十圓を交附するのと同様で、物品に對して倍額の代金を負擔するのである。たとひかういふ事は、少額の場合に行はれてゐるとしても、經濟の法則に於て、少額ならば可、多額ならば不可と言ひ得べきはずはない。小を集めて大に及すの眞理は、すべての場合に通用する。塵も積もれば山となるとは、古來の金科玉條である。

釣銭に對しては感覺を鋭敏にし、是非ともこれを受取らねばならぬばかりでなく、更にこれを勘定し、間違なきや否やを檢査する事を怠つてはならない。これを粗略にする弊は、我々が通貨を異にし、風習を同じうしない外國に旅行する時に於て著しく感ずる事で、時々苦い、忘れ難い經驗を嘗める事がある。

私は往年シカゴに於て、とある藥店で齒磨一箇を購ひ、これに對して五十セントの代金を支拂ふに當つて、小錢の持合せがあつたに拘らず、大紙幣を出して釣銭を求め、しかもこれを

調べずにポケットに投げ、外に出ようとした時、店員から呼止められ、自分の思違で、代金として二十五セントを差引いた勘定で釣銭をお渡ししたから、餘分を戻してくれと言はれたのに頗る不愉快を感じたが、これを質すと、金錢表示器は明らかに二十五セントの収入を現して居つて、店員の要求の根據ある事を證明してゐた。これはいかにも自己の不注意を現したものと覺つて慙愧に堪へなかつた。

最も忘れ難い事は、ワシントンに居つた或日、招かれて故ブライアン翁のホテルで朝食を共にした時の事である。兩人好むところの品を選んで注文し、やがてその品々が程よくテーブルの上に配置されて、ボーイの將に一揖して去らうとする時、翁はこれを追つて戸口に至り、低聲で釣銭をもつてゐるか否かを尋ねた上で、或貨幣を出して、そのうちの或額をチップとして與へ、釣銭を受取られた所を目撃して、今更ながら驚歎した事があつた。翁はもとより清貧の士である。かやうな舉に出られたのは、決して金錢を惜しむ爲ではなくて、經濟觀念の自然の發露がかうなつたのである。いはゆる成金者流でなければ、たとひ富裕の人でも浪費を省き、實用を重んずるのは、米國人のおのづからなる習慣である。釣銭は勿論、共同支拂いの割前勘定の場合も頗る嚴重である。これは我々日本人の學ぶべく、心すべき事である。

日常生活に於ける少額の受拂にも、市場の大取引にも釣銭は伴なふ。國家經濟に就いて言へば、貿易の出超には釣銭があり、財政上で言へば、歳計の剩餘はこれまた國民納税の釣銭といふべきものである。釣銭の受拂は決して粗略にすべきものではない。

# ニコニコボックスの関幸重氏と 祖母すぎ・祖父秀夫

## ～そして三島高等女学校



愛知ロータリーEクラブ

会長 天野 元成  
天野 恭子

三島大社の神官の娘を母として生まれ、この三島の地に所縁の深い米山梅吉氏。ここ静岡県駿東郡長泉町上土狩に米山梅吉記念館があります。

この記念館にほど近い三島駅の北側に三島北高等学校があります。この学校は、明治34年に三島の小松宮別邸敷地の中に田方郡立三島高等女学校として創立され、大正11年に静岡県立三島高等女学校となった伝統ある学校で、昭和24年に三島北高等学校となりました。

当時、地区随一の高等女学校として三島はじめ伊豆長岡など、この地方の女子高等教育を担いました。(下記写真は、三島北高等学校年史より)



大正時代の三島高等女学校



駿豆鉄道 三島⇄伊豆長岡、大仁

三島高等女学校が創立された頃、大仁・伊豆長岡と三島駅（現在の下土狩駅。当時の東海道線は御殿場回りで現在の三島駅は丹那トンネル開通後設置）を結ぶ豆相鉄道が開業し、その後電化され駿豆鉄道となり現在の伊豆箱根鉄道駿豆線となりました。

東京からの便利が良くなったことから、多くの湯治客が伊豆長岡温泉に訪れ、また、駿豆鉄道の開通で伊豆長岡から三島に高等教育を受けに行く学生も増えていきました。

伊豆長岡古奈の旅館『本陣』の四人姉妹の三女であった私の妻（天野恭子）の祖母「石橋すぎ」は、明治40年3月17日に生まれ、大正8年4月、三島高等女学校に入学し、大正12年3月に21回生として卒業いたしました。当時は小松宮別邸、現在の三島駅南の楽寿園に高等女学校はありました。



大正時代の長岡温泉古奈旅館『本陣』



四人姉妹 前列右が祖母



三島高等女学校時代の  
祖母すぎの制服姿

実家の『本陣』は、伊豆長岡温泉古奈でも歴史ある旅館で、東京からも多くのお客さんが訪れ、大正時代のモダンガール、モダンボーイで一杯でした。

『本陣』の常連のお客様の中に、東京日本橋の羅紗問屋『植村伝助商店』の大番頭、関幸重氏がいらっしゃいました。

三島高等女学校を卒業した「すぎ」は、行儀・作法の習得のため上京し、関幸重氏宅で勉強することとなりました。

『植村伝助商店』は、戦前、東京日本橋にあった羅紗問屋で、明治28年に三越洋服店を三越から譲渡されるなど、三越、三井物産と関係の深い会社で、当主は植村伝助を襲名しておりました。

当時は、明治20年3月生まれで慶應義塾理財科を卒業された植村伝助氏が当主で、子爵諏訪忠元氏次女の廣子さんを妻とし、東京の高額納税者になるなど大きく発展していました。

植村伝助氏と双子の妹であったテルさんは、神奈川県立第一高等女学校（岸恵子さん、草笛光子さんの出身校で、現在の横浜平沼高校。妻の恭子も卒業生）を明治39年第四期生として卒業し、植村伝助商店の大番頭であった関幸重氏と結婚いたしました。

上京した「すぎ」は、関幸重・テル夫妻に大変かわいがっていただき、行儀・作法を身に着けていきました。祖母すぎは、とても言葉遣いが丁寧な人でありました。

植村伝助商店当主の植村伝助氏は、子爵諏訪家の次女が嫁がれるほどのお家で、米山梅吉氏は、大和高取藩植村家中の和田竹造氏と三島大社神官日比野氏の娘である「うた」の子、和田梅吉として出生し米山家の御養子になられましたが、和田家主君の高

取藩植村氏と植村伝助氏が、ご親類であったかは不明です。

植村伝助商店は、羅紗問屋として時代の先端商品を取り扱っており、当主はじめ幹部社員もモダンボーイが多い会社でした。

植村伝助商店が羅紗問屋であったのは戦後直後までで、植村伝助氏の四男の植村秀氏は、『シュウウエムラ』としてハリウッドで世界的なメーキャップアーティストとして著名になり、更に時代の先端に行かれました。現在は、ご息子の植村浩氏が化粧品の株式会社ウワを立ち上げられています。



祖父母、秀夫すぎ結婚式写真  
新郎新婦の両側に仲人関幸重・テル夫妻  
(写真は有賀写真館)



関幸重氏  
昭和初期ですが、羅紗問屋の大番頭だけあってハイカラな洋装です。

祖母すぎを子供のように可愛がってくださった植村伝助商店大番頭の関幸重・テル夫妻は、植村伝助商店社員で野球やスキーとスポーツ万能であった平野秀夫をすぎと引き合わせ、仲人として東京出雲大社での結婚式を取り仕切られました。



関幸重氏は、植村伝助商店の大番頭として、また東京ロータリークラブ会員（大正15年9月7日入会）として活躍されました。祖父母の結婚式の時には東京ロータリークラブ会員であられました。

関幸重氏は、『ニコニコボックス』の創始者と言える方で、東京ロータリークラブ事務局様から頂きました資料によりますと、大阪ロータリークラブの方が考えたものを大きく広げられたものです。

昭和11年9月30日、社会事業委員の関幸重氏が、関東大震災の孤児300名を玉川園に招くために、例会で協力を求め、小箱を持って寄付を集め、この箱を『ニコニコ箱』と名づけられました。

当初は紙箱でしたが、関幸重氏が自ら恵比寿顔を彫り込んだ木箱を考案され三越百貨店で特製されました。

関幸重氏は、例会のたびに、会員の誕生日や、お祝い事や慶事に際して善意の寄付を集め、えびす顔で社会奉仕の喜びを表しました。



関幸重氏のニコニコボックス

「にこにこおじさん」として関幸重氏が、社会奉仕のためにご尽力された「ニコニコボックス」は今では、国内のロータリークラブの多くに広まっています。関幸重氏の奉仕の志は、全国のロータリークラブで今も綿々と受け継がれています。

奉仕活動をもっと行っていこうと当クラブの今年度テーマは、『奉仕で広げよう 友愛の輪』といたしました。



当クラブのニコニコボックス

関幸重氏が、祖母すぎと祖父秀夫の縁を結び、義父秀和が生まれ、長女の恭子と私が結婚し長男長女に恵まれました。私たちにとっては、関幸重氏こそが、ご縁を紡ぐ恵比寿様であったと思います。

ロータリークラブのニコニコボックスの由来をたまたま義父に話をしていたところ、関幸重氏とのご縁がわかりました。義父が旧制芝中学二年の時、東京空襲で白金台の自宅が罹災した際も、関幸重氏が住居を直ぐにお世話してくださるなど、まさに慈愛の方でありました。義父は一昨年他界しましたので、更に詳しく話を聞くことが出来ませんでした。遺品を整理していたところ、祖母の実家や三島高等女学校時代の写真や、仲人の関幸重氏の写真が出てまいりました。祖父母も義父も御殿場の富士霊園で眠っておりますが、大正時代からの関幸重氏とのご縁を感じ、妻・恭子も今年度よりロータリークラブに入会いたしましたので夫婦で、より一層ロータリアンとして奉仕活動を行っていきたくと思います。

<ニコニコボックスの関幸重氏の事を伝えたく本稿を寄稿いたしました。>

# 東京ロータリークラブの ニコニコ箱

現在、全国の各ロータリークラブに置かれているニコニコボックスは、昭和11(1936)年7月に大阪ロータリークラブが初めて設置した。これを提唱したのが藤原九十郎である。

藤原は明治26(1894)年生まれ。長崎医学専門学校で学び医学博士になった。昭和初期



藤原九十郎氏

から煙害、汚水や騒音など公害の研究に力をいれ、日本で初めて保健所を作るなど保健行政の分野でも活躍した。大阪ロータリーでは1938年に会長を務めている。

昭和11年8月4日に開催された第七十区東京協議会の席で藤原は、コミュニティーサービス委員の活動に就いて、として発言をしている。このなかで「尚今一つ御紹介して置きたいと思ひます。それは社会サービスの爲めの基金の捻出に就いて大阪倶楽部が近頃實行して居る事で御座居ます。それは今年からニコニコ箱を設置した事であります。これは會員に嬉しいことがあつた時例へば誕生日、ゴルフその他の競技でカップを貰つたとか、或は御孫さんが生れた時、日曜日の散歩で自動車に乗るのをやめてセーブした時其の他の個人的家庭的にまた精神的に物質的に色々の喜びを持つた時に、適宜の喜捨をする箱になるのであります。これは本人の自發的になるものもありますが他よりの告發による場合もあります。嬉しいことであるだけにやり方に依つては例會も面白くなごやかに、

且つ社会サービスのための資金を得る方法として一石二鳥の試みであらうと思ひます。」と報告している。

この協議会に参加していた関幸重は、9月30日の東京ロータリークラブの例会で早速ニコニコ箱を廻し始めた。社会事業委員としてははじめた名目は、孤児を玉川園に招くための協力であった。このときはありあわせの紙箱を利用していたが、後に関氏が考案して恵比寿の顔を彫った木箱が使用されるようになった。ここには「昭和十一年九月吉日」



関幸重氏

と刻印されているので、関氏がニコニコ箱をはじめた日を記念しているものであろう。この箱は水曜倶楽部時代から、時を経て現在も使われているという。

慈善事業の特別寄附としてはじめられたニコニコ箱は、その後誕生祝いの品物を贈るようになっていった。誕生日の會員の前に関氏が祝辞を述べ、ニコニコ箱を出して喜捨を受け取ったという。こうして関氏はニコニコおじさんと呼ばれるようになった。関氏が病に臥せてからは今村信吉氏が二代目ニコニコおじさんとなり、東ヶ崎潔氏もニコニコ箱の活動を奨励し、伝統は引き継がれていった。

東京ロータリークラブのニコニコボックスは社会奉仕援助、災害援助支援など幅広く活用されるようになっており、2019年度にはここから当館への多額の浄財を頂戴している。

## 寄贈資料の ご紹介



ロータリーマークの入った帯

ロータリーマークが  
刺繍された着物



このたび、日本人で初めてRI会長を務めた東ヶ崎  
潔氏ご令孫の佐藤綾子様より、ロータリーマークの入  
った着物と帯、写真や資料をご寄贈いただきました。

綾子さんは、小学校高学年まで潔氏と同居されてい  
ました。潔氏とはにかく孫には甘いおじいちゃまで、オ  
ーストラリアへ行けばコアラのぬいぐるみ、ニュージー  
ランドに行けばマオリのお守りと、世界各地のお土産を買  
ってきてくれました。アメリカからは等身大の人形を持っ

て帰ってきてくれたこともありました。「切手収集をした  
い」と綾子さんが話をすると、すぐに世界各国の切手  
をまとめて持ってきてくれました。切手を少しずつ集める、  
という綾子さんの夢は一気になえられてしまいました。  
ロータリーのクリスマス会にも連れて行ってもらいました。  
子供たちで歌を歌ったりゲームをしたり、とても楽しい思  
い出です。海外生活が長かった潔氏は晩年、日本語  
より英語が先に出てくるようになっていたそうです。

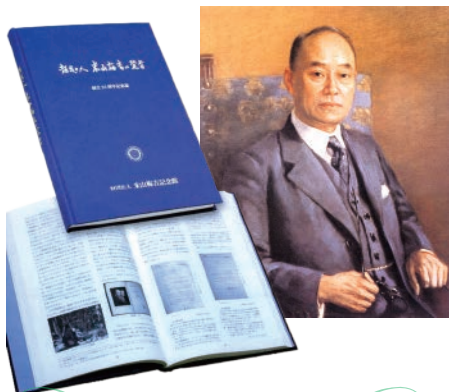
綾子さんは、お母さま（潔氏の長女恵美子  
さん）からこの着物を引き継ぎました。残念ながら  
恵美子さんも着物の由来について詳しくは  
わからないそうです。大小のロータリーマークが  
ランダムに刺繍してある紺地の着物は、特別に  
誂えた着物のようです。帯はオリブグリーンを  
基調にした地色にロータリーマークが三列に並  
ぶもので、どこか正倉院の古裂のような静かな  
趣の帯です。この着物を着た写真は残されて  
いませんが、年次大会や外国訪問時に着用さ  
れたものでしょう。

約50年前の東ヶ崎氏の活動を偲ばせる、  
貴重な資料のご提供に感謝申し上げます。



ご令孫 佐藤綾子氏

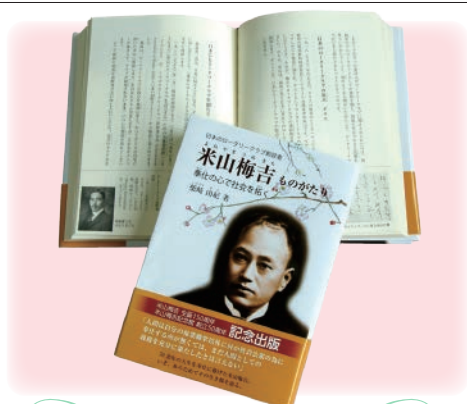
東ヶ崎潔氏



## 『超我の 人 米山梅吉の 聲音』

創立 35 周年の記念出版。ロータリアン、教育者、社会奉仕者としての米山梅吉研究を集大成した最良の一冊。「米山梅吉の生涯や業績」「ロータリーとのかかわり」「記念館の歴史」など、詳細な解説がなされている。資料編には、講演、月報やラジオ放送なども掲載。館所蔵の図書目録、年表なども網羅されている。

(財)米山梅吉記念館編集・発行  
B5判 260頁 2,500円(税込)



## 『米山梅吉ものがたり』

生誕150年・(財)米山梅吉記念館創立50周年記念事業出版  
明治、大正、昭和にわたる激動の日本に「奉仕の理想」を実現した人。我が国ロータリークラブの祖、社会への奉仕を生涯の信条とした、その根源が読み明かされる。

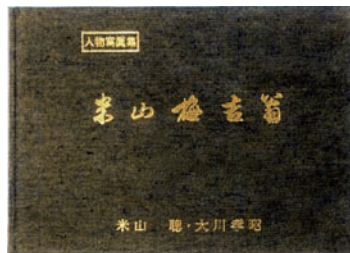
小・中学生から読める【伝記】ジュニアノンフィクションシリーズ  
著者／柴崎由紀 令和元年7月 銀の鈴社発行  
A5判 280頁 1,980円(税込)



## 米山梅吉俳句集『藍壺俳句』

創立40周年事業として出版。米山自らが手がけた草稿をもとに、句会での作品、書簡に記されたものなどを加えて349句を一冊にまとめたもの。作句の時期や機会なども記し、その時々々の生活や人脈を垣間見ることができる。

(財)米山梅吉記念館編集・発行  
A5判 76頁 1,000円(税込)



## 人物写真集『米山梅吉翁』

慶應に生まれ明治、大正・昭和を生き抜いた日本の偉人、米山梅吉の幼少から晩年までを網羅した写真集で、米山研究には欠かせない一冊。米山梅吉の遺品・愛用品などの内容別に数多くの写真が収録されている。

執筆・編集／米山聰 写真撮影・編集／大川孝昭  
特製布張り装丁 ケース付き 平成9年4月発行  
B4判横長 460頁 5,000円(税込)

購入ご希望の方は、書名、数量、お名前、連絡先をお知らせください。  
商品が到着しましたら同封の振込用紙にて代金をお支払いください。  
商品代金の他に、別途送料をご負担ください。

お申し込みは 公益財団法人 米山梅吉記念館  
TEL:055-986-2946 FAX:055-989-5101

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分  
東名沼津ICより15分

[開館時間]午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日  
●12月28日～1月4日  
●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報  
Vol.38 秋号

発行日／令和3年8月20日

発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 積 惟貞  
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101  
URL <http://yoneyama-umekichi.jp/> E-mail [yumh@ai.tnc.ne.jp](mailto:yumh@ai.tnc.ne.jp)